

毎週のように日本各地の河川や海岸へカヌーにかけているが、水面すれすれに航行する小舟からは、その川水や海水の状態の良否が容易に実感できるし、転覆すれば確実に理解できる。七月最後の週末にカヌーで半周した積丹半島では海底の岩石が白色であることも影響し、透明な海水は紺碧という言葉を実物に具現したような色合いで感動した。

このような水質の良否を数字で表現するためには、水素イオン濃度や化学的酸素要求量などの方法があるが、代表は生物化学的酸素要求量(BOD)といわれる数値である。これは工場や家庭からの排水を原因として水中に溶融している有機物質を、水中の細菌が分解するときに必要な酸素の容量を測定するものである。一リットルの川水の浄化に必要な酸素をミリグラムで表現するが、数字の大小は汚染と比例することになる。

日本には一〇九本の一級河川が存在しているが、それらの河川の約千箇所、国土交通省河川整備事務所が水質を毎月測定し、その年間の平均数値によって「全国河川ランキング」を発表している。新聞などには上位五位と下位五位しか発表されないが、インターネットで官庁のホームページを検索すれば、すべての河川(一〇九水系の一六六河川)についての順位を入手することができる。

今年の話題は「タマちゃん」が出没して一躍有名になった鶴見川が全国最低の順位になったことであるが、一般に大都市域を通過する河川が下位になるのは仕方がないことであり、上位になるのは大半が過疎地域の河川である。今年には四本の河川が同一の数値で一位になっているが、三重県の宮川以外は、すべて北海道の河川(尻別川、後志利別川、札内川)であり、流域はほとんど人家のない地域である。

ところで、筆者も毎年何度かカヌーにでかける高知県の四万十川であるが、ここは「日本最後の清流」というキャッチフレーズで、世間では日本を代表する清浄な河川として通用している。ところが、今年の順位は七二位である。数値では一位の四本の河川のBODが〇・五であるのに対比して一・〇である。実際、今年の七月にカヌーで川下りをしてみると、予想以上に汚染されていることを実感した。

もちろん、清流の条件は水質だけではなく、ダムがないとか兩岸の風景が素晴らしいなど様々な条件が関係するが、水質が日本の一級河川全体の半分程度の順位でしかない河川が「日本最後の清流」といわれ、多数の人々が訪問してくるのは何故かといえば、昭和五八年に日本放送協会が放送した一本の番組「日本最後の清流」の影響である。二〇年前に世間に伝達された強烈な印象が水質の悪化と関係なく現在まで存続しているのである。

原子力発電所が安全な施設であり、そこでの発電は火力発電と比較して炭酸ガスの発生が微量であることは繰返し明確な数字によって広報されている。しかし、依然として世間は十分に納得していない。それは四万十川を「最後の清流」と表現した曖昧な言葉が、汚染を明確に表示する数字でさえ圧倒してしまうのと同様に、厳密な数字程度では不安をもたらす曖昧な情緒に敵対しえないのである。

原子力発電所の問題に限定されることではないが、社会では厳然たる現実が強烈な印象の一言によって粉碎されることは多々発生している。曖昧な情緒は正確な情報より威力があるのである。説明責任(アカウンタビリティ)が要求される時代にあって、この情報と情緒の関係を考慮した説明を社会にしていくなければならない。